

研究ノート

中世太宰府の道

—太宰府東北部の様子—

山村 信榮

1 はじめに

考古学による道路の研究は、1960年代に平城京を中心とする古代宮都の街路を遺構として認識できたことによるところが嚆矢の例であり、1990年代になって地方において相次いで古代官道が発見されるや、遺構としての道路遺構の一般性や構造について急速に事例の集積と分析が繰り返されるようになり、現在では当たり前のように調査や研究の対象となっている。大宰府においても大宰府条坊の存否をめぐる1970年代まで論争が続いていたが、1980年代に遺構として条坊街路が複数箇所で見られるようになり、今や古代において道路遺構の存在は当然のものとなった。しかしながら道路遺構の存在は古代のみならず、各時代にわたっており、大宰府においては特に中世に帰属する時代の道路遺構の発見例は年を重ねるごとに増加している。しかし、その割には注目されることが少なく、そのこともあってか、大宰府における中世都市論も低調なまま推移している。

本稿では近年徐々に調査情報が増えている、大宰府における11世紀以降の道路遺構や地割に関する遺構の事例を取り上げ、その造営の背景と都市性について言及してみたい。

2 太宰府天満宮周辺

現在の太宰府天満宮は『天満宮安楽寺草創日記』によれば、社殿の位置は祭神である菅原道真を埋葬する公葬地への途上で、牛車が動かなくなった場所を選地したとされ、古代の大宰府条坊域には含まれず、事実、周辺の遺跡の状況から古代前半において当該地域の開発は低調であり、手つかずに近い土地に廟所が営まれた様子であったと想像される。

天満宮安楽寺は延喜5年(905)に味酒安行が御殿を建設して以来、徐々に境内地としての整備が進み、康和2年(1100)には大江匡房の「参安楽寺詩」(『本朝続文粹』)によればすでに廟前に3つの池があることが記載されており、この段階で南北を基軸とする廟所としての伽藍の概要が定まっていたものと考えられる。天満宮境内周辺では境内も含め、現在の門前町にある太宰府天満宮参道遺跡、連歌屋遺跡、馬場遺跡、大町遺跡、奥園遺跡などで調査がおこなわれており(図1)、現在の境内およびその周辺地においては11世紀の内に面的な土盛りや掘削



図1 太宰府天満宮周辺の遺跡と道

がおこなわれ、さらに12世紀中頃から後半に規模の大きな整地などの改変がおこなわれていることが見えてきている。この廟所を取り巻く現在の門前域では、南北に連続した地割や道路遺構そのものが複数の個所で発見されている（図1）。

天満宮境内の西に隣接する連歌屋遺跡では幅5メートルから7メートル、深さ30～50センチの帯状の連続する南北の窪みが検出されている。連歌屋2次調査では幅6メートルの「褐色土」とされる南北の溝状の落ちがある（図2上段）。遺物は12世紀中頃以降のものを含む。その南でおこなった6次調査の南北溝6SD050は、土器の出土から12世紀中頃以降に埋没したものと考えられている。その南の連歌屋1次の南北溝1SD200は、同遺構の覆土である「淡灰土」から出土した土器より、12世紀前半以降のものとされている。この帯状の遺構は現在「小鳥居小路」と呼ばれる門前の南北基軸道路に沿って検出されている。その基軸道路の南側は正東西方向で施工された天満宮参道を挟んで「溝尻」の南北路へと続いているが、馬場遺跡8次調査はその道沿いでおこなった調査で、調査区の西端で礫に覆われた南北方向の堀の東岸肩にあたる部分が検出され（8SD130）、その東側に幅2メートルほどの道路面（8SF025）が見つかった。遺構は12世紀後半頃から埋没し始めていとされ、造営はそれに先行するものといえる（図2下段）。さらにその南の馬場遺跡2次調査では、南北溝SD001は、調査時点での所見では上層が12世紀後半、下層は12世紀残半前半から中頃の遺物が出土しているという（未報告）。

これら発掘調査で確認された12世紀の土地区画に係わる溝の任意中点による傾きは馬場2次SD001と連歌屋1次1SD200間はN-6度13分-Eで、連歌屋1次1SD200と連歌屋6次6SD050間はN-10度37分-Eで、連歌屋2次褐色土の間はN-17度53分-Eであり、北に行くほど東へ偏向している様相が見られる。

現在の道や町割りの傾きについて見てみよう。太宰府天満宮参道の傾きはN-0度56分-Eであり、「小鳥居小路」の傾きはN-8度45分-E、周辺の土地区画の傾きはN-7度22分-Eであり、東西方向の参道が正方位に近く、南北に交差する小鳥居小路は北に対し東に若干傾斜していることがわかる。それに対し発掘で見つかった連続する南北の溝状の窪みは、南端の馬場2次SD001と北端の連歌屋2次褐色土（区画施設か）間ではN-7度22分-Eであり、現地形の区画割の傾きにほぼ近い数値となる。この12世紀に形成された連続する南北の溝状の窪みは、天満宮境内の西側に広がる門前地域の開発の基軸線ともいえる土地区画線であったとみられる。

13世紀後半から14世紀前半頃の所産と考えられる連歌屋1次の建物遺構1SB010やその東側にある南北溝の1SD035は前者がN-7度42分-E、後者がN-8度-Eの傾きであり、12世紀段階に設定された土地区画の影響を受けているものと判断される。また同時期の鎌倉後期に、12世紀の区画施設の溝1SD200の上層で、下層の溝の位置の上ないしその横で連歌屋1SD227や連歌屋6SD005などが形成され（連続性や傾きに付いては調査区が狭小のため不明）、12世紀に区画として成立したその枠組みが、鎌倉時代以降に継承されていたことを示しており、現代に残された「小鳥居小路」の道筋の成立の根源となっている。江戸時代以降の絵図や伝承では、この南北のラインはかつての境内地と門前のエリアを分かち重要なラインであったとされている。

3 原遺跡（原山・原八坊・原山無量寺）

大宰府条坊の北辺において、もう1か所道路遺構がまとまって検出された遺跡がある。行政的には「原遺跡」の名称で発掘調査がおこなわれてきた場所で、かつて天台系寺院の山岳寺院「原山」があった場所でもある。原山は近世史料では「原八坊」や「原山無量寺」とも記載され、安楽寺天

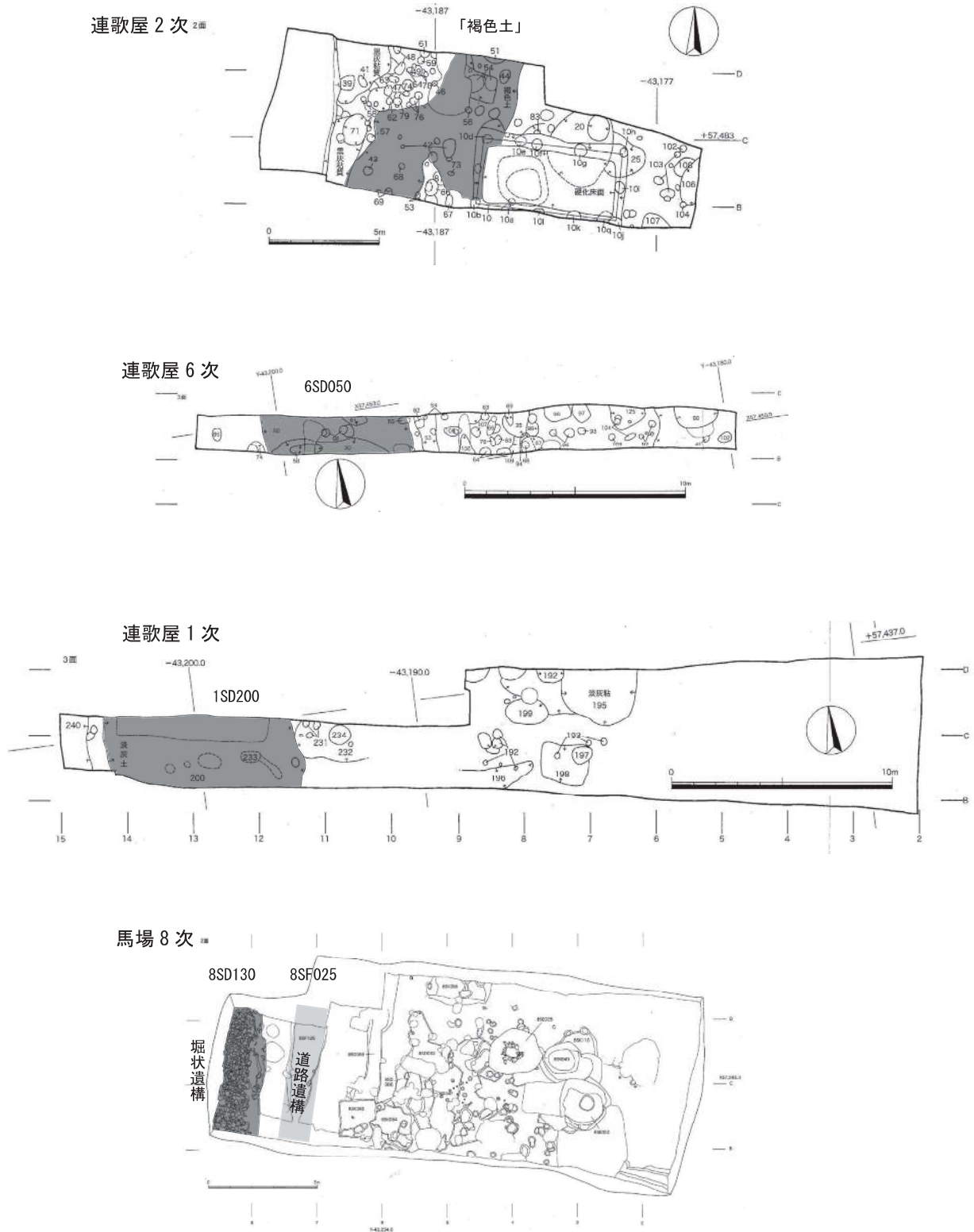


図2 小鳥居小路に沿う地割と街路

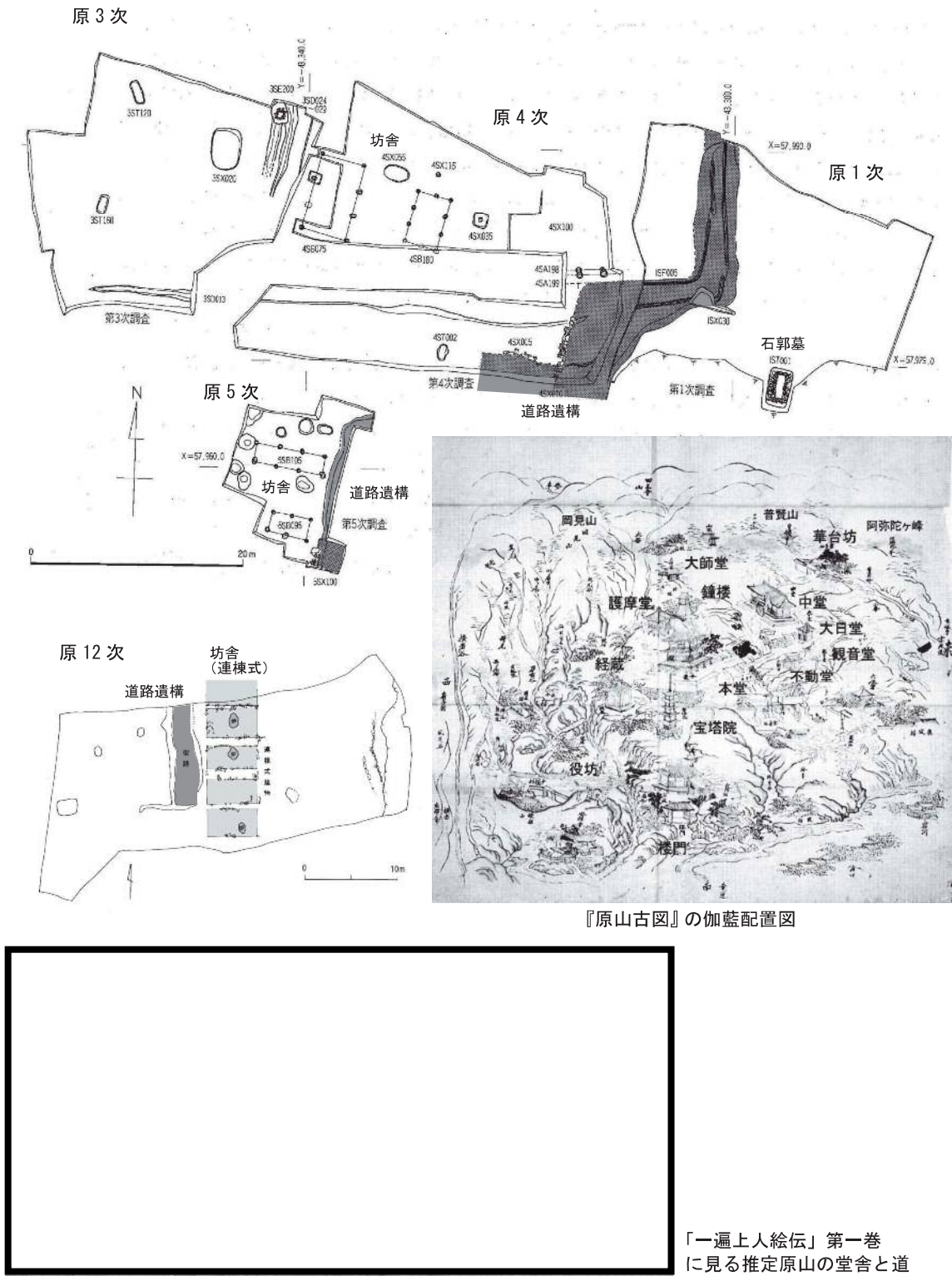


図3 原山と道路遺構

満宮と所縁が深く、寺伝では道真公の葬送に係った集団といわれ、中世後期には下山して安楽寺に帰属するようになった。

遺跡は通称「四王寺山」の安楽寺天満宮側に当たる東斜面を雛段状に成形し、「岡見山（別称は水瓶山）」から続く尾根線に中堂、護摩堂、本堂、経蔵、宝塔などを配す中心伽藍を展開させ、その南北の尾根谷に関連の坊群が占地する形を採っている。街路と思しき小径がこの雛段状の造成面を繋ぐように、時にはクランクして曲がり、時に急な坂となりながら展開している様子が発掘調査で明らかにされている（図3）。特に原1次調査区と4次調査区の間では東にある1次調査側の平安後期のものと思われる石郭墓とその後に展開した坊舎群との間に幅3～5メートルの道路で聖域と僧地とが分けられた様子がうかがえ、原12次調査では幅3メートル弱、奥行き5メートルの建物5棟以上が並ぶ連棟式の建物群の前を幅3約メートルの道路が計画的に配置されている様子がうかがえる。坊の末裔が相伝してきた『原山古図』（個人所蔵）の山内図によれば、前者は「観音堂」の東側辺りと類推され、後者は宝塔院東の「役坊」辺りと思われる位置にあたる。

このように中世の山岳寺院内では山の尾根や谷を切り開き、堂舎や坊、葬送の場を設けつつ、それらを結ぶ街路も十分に整備していた様子が見て取れる。この街路は後の土地利用に取り込まれ、現在の主要な道路と重複、並行する形で残る結果となっている。

ここで注目すべきはこの寺域の東を限ると考えられる1本の南北路の存在である。その道は天満宮門前域の北側、御笠川を挟んだ「岩渕」と呼ばれる辺りから発して川に沿って直進する道であり、現在も使用されている（図1）。その道の傾きはおおよそ北に対して東に7度振れた方位であり、それを南に延長した位置には「小鳥居小路」がある。この通りは北進して原山の座主坊であった「華台坊」に至る、山内でも重要なルートでもある。

4 市立てと方位と仏

原山の「華台坊」に至るルートの先にはそれを遮る丘があり、『原山古図』によればそこには「阿弥陀ヶ峰」と注記されている。反対に「小鳥居小路」を南に延伸した先にも丘があり、そこは「峰の薬師」があり、かつては薬師堂が祀られていた（図5）。近世の商人の間で伝えられていた商売の秘伝書である『連尺之大事』に記載されている「市立図」は、市場の理想的な空間を表現しているが、そこには直線的な街路に面した市まちがあり、その道の上手に阿弥陀が、下手に薬師が祀られた様子が描かれている（図4）。宗教的空間をつくることが市を立てるに当たり重要視されていたことが読み取れる。大宰府条坊が衰退していく平安後期以降に成立した太宰府天満宮周辺の門前エリアと御笠川を挟んで隣接する山岳寺院の原山は一見無関係のように見られがちであるが、北に対し東に8度ほど振れる方位を持つ一本の道路を共有する一体的な思想を背景として空間を共有するもので、その範囲は原山の「阿弥陀ヶ峰」から五条の「峰の薬師」に至る南北約2キロに及ぶ範囲に及んでいたものと考えられる。まさにこの空間は宗教と都市とが一体的に存在した、古代とは異なる新たな大宰府の都市空間であった。

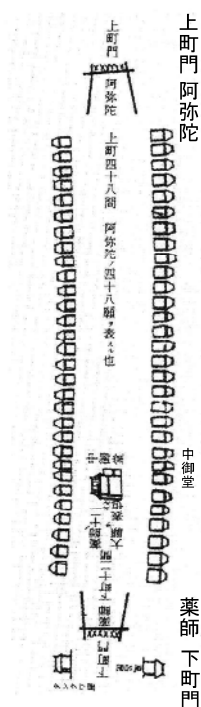


図4 「市立図」



図5 中世太宰府図

参考文献

- 『太宰府天満宮（太宰府天満宮遺跡）』太宰府天満宮 1988年
- 『太宰府天満宮Ⅲ』太宰府市教育委員会 1995年
- 『太宰府天満宮参道』太宰府市教育委員会 1993年
- 『連歌屋遺跡1』太宰府市教育委員会 2003年
- 『馬場遺跡2』太宰府市教育委員会 2006年

出典

- 図3「原山古図」（『一遍聖絵を歩く』高志書院 2012年 p.61）
- 図3「一遍上人絵伝」（複製、太宰府市文化ふれあい館蔵）
- 図4「市立図」（『一遍聖絵を歩く』高志書院 2012年 p.160 榎原雅治「中世東海道の宿と渡の空間構成」の図に加筆）

（やまむら・のぶひで／太宰府市教育委員会文化財課調査係長）